第 33 回　安田女子大学・安田女子短期大学　エッセイコンクール

課題部門　テーマ：家族について思うこと
優良賞「忘れても、忘れていない」
家政学部生活デザイン学科　1 年 2 組　本台 理華

忘れても、忘れていない

思い出は、できることなら心の中に一生残しておきたい。

年をとっても忘れることなく、いつでも楽しかったころを思い出したい。だがそう簡単にはいかないのが現実である。年を重ねるほど忘れっぽくなるし、体も頭も思うように動かない。

祖母が私にお小遣いを渡しに何度も家に来るようになったのが始まりだった。私の家と祖父母の家は隣同士で、家に来るのはそう珍しいことではなかったが、このあたりから急激に物忘れがひどくなり、気づいたときにはすでにアルツハイマー型認知症を発症していた。

料理が作れなくなった。家事もだんだんできなくなった。一緒に暮らしていた祖父は 80 歳を超え、日に日にできなくなることが多くなる祖母をなんだか悲しそうな目で見つめていた。疲れがたまり、時には祖母に対して怒りをぶつけることもあった。しかし、そこから一年もたたないうちに祖父に末期のがんが見つかり、2018 年が始まったばかりのころ、あっけなくこの世を去ってしまった。

ここまで読んで、これはとても悲しいお話なのではないか？と思われたかもしれない。実はそうではないのだ。

確かに悲しかった。祖父を病室で看取ることができ、初めて身近な人の「死」を目の当たりにした。かすかな心電図音、息も細い中、耳元での必死の家族の声かけ、電話越しの「おじいちゃん」と呼ぶ従兄弟の声を聴くたび、少し心拍が上がったりしていた。祖父は最後まで必死に生き抜いたのだ。その場には勿論祖母もいて、親戚家族とともに医師による死亡確認がされた。まもなくして、祖母がこんな一言を発した。

「おじいさん、全然おきんねえ、寝とるん？」

たった１，２分前に、一緒に看取ったばかりである。

「おじいさん、全然おきんねえ、寝とるんかね？」

「おじいちゃんは死んでしもうたんよ」

「死んだ・・・⁉　そりゃ、　そりゃ涙が出る、涙が出るわ」

と、いうと祖母は声を震わせ、涙をぬぐっていた。そこで私は、祖母はアルツハイマー型認知症でありながら死を受け入れることができたのかと思ったが、なんとこのやり取りを5，6回繰り返すのだ。しかもほぼ全く同じ言葉で。泣いていると思えば数分後にはケロッとして「寝とるん？」と、また同じことを言っていた。何回も繰り返すうちに返事をする側も可笑しくなって、看護師さんも「おばあちゃん、良いキャラしとるわぁ」と言った時、祖父が寝ている病室は笑いに包まれた。とても数分前祖父が亡くなったとは思えない、面白い状況であった。

徘徊や過度な被害妄想、幻覚、物を隠すなど、認知症には人それぞれ色々な症状が出る。徐々にわからなくなる恐怖を身をもって経験している祖母本人や、直接的に介護をしていた親戚や両親の苦労は計り知れない。私は夜一人になる祖母とご飯を食べたりしていたが、なかなか椅子に座ってご飯を食べ始めないのでどうしたのかと思うと、突然今流行りのYouTuberかのようにキッチンの道具や収納の説明をし始めたり、化粧道具の箱を開けっぴろげにして化粧品の紹介をしたり、昔の知り合いの話をし始めて、少し時間がたてば話したこともまるっきり分からなくなるけど、その時間がすごく面白かった。祖母は、いつも楽しそうに話してくれた。

忘れること、自分の記憶がどんどんなくなること。とても恐ろしいと思う。誰でも起こりうる認知症にならないためにも、自分の趣味や仕事を大切にしてほしい、バランスの良い食事を摂って、たまには外に出て思いっきり空気を吸って気分転換をしてほしい。大好きなおじいちゃんおばあちゃんがいるこれを読んでいる皆さん、ぜひこのことを伝えてください。

祖父が亡くなって１年半。祖母は施設に入居し、住んでいた家はもう誰もいなくなってしまった。

幼いころ一緒に旅行に行ったこと、毎年誕生日に描いていた私の絵を必ず飾ってくれていたこと、お正月は餅つきの手伝いをするのが好きだったこと、両親が夜いないとき、オムレツを作って食べさせてくれたこと、高校入試で合格した時、立ち上がって喜んでくれたこと。絶対に忘れたくない思い出ばかりである。

拝啓　おじいちゃん　おばあちゃん

大学生になりました。友達もたくさんできて、充実した学校生活を送っています。

私には夢があります。大変なことも多くあると思うけど、これからの人生、毎日を大切にしながら生きていくから、遠くからでも、すぐに忘れてもいいから見守っていてください。そして、おばあちゃんが楽しかった頃を思い出せる日が来ますように。

敬　具

10 月で祖母は 78 歳になる。誰も住んでいない家の庭には、祖父が手入れをしていた盆栽がそのまま残っている。心地よい風が吹いた。秋もそろそろ深まりそうである。

＜講評＞

祖父母とのかかわりを通して家族について深く論じている作品である。年齢を重ねるなかでの人の喪失の在り様を、感性豊かに描写している。祖父の死という大変重たいテーマであるが、その時間空間を共有する祖母と家族をユーモラスに描写しており、インパクトのある作品である。筆者は、祖母を尊敬しなくてはならないと理解しつつ、認知症になってしまった祖母を認めたくない自分を見つめている。しかし、祖父を表現しつつその中で自分の祖母に対する愛情をにじみだせたところが優れている。

審査委員／永田彰子、吉目木晴彦、大庭由子、西村聡生、冨岡治明（委員長）